

論 文

音楽理解を意図した音楽づくりの指導に関する一考察 —効果音づくりを通して—

櫻井琴音¹・早川純子²

(¹子ども学部子ども学科, ²南九州大学人間発達学部子ども教育学科)

(平成29年1月5日受理)

A Study of Instructing Music Creation Aimed to Encourage Music Understanding : Through a Creation of Sound Effects

Kotone SAKURAI, Junko HAYAKAWA

(*Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University*¹
*Department of Child Education, Faculty of Human Development, Minami Kyushu University*²)

(Accepted January 5, 2017)

論 文

音楽理解を意図した音楽づくりの指導に関する一考察
—効果音づくりを通して—

櫻井琴音¹・早川純子²

(¹子ども学部子ども学科, ²南九州大学人間発達学部子ども教育学科)

(平成29年1月5日受理)

**A Study of Instructing Music Creation Aimed to Encourage Music Understanding
: Through a Creation of Sound Effects**

Kotone SAKURAI, Junko HAYAKAWA

(*Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University¹*
Department of Child Education, Faculty of Human Development, Minami Kyushu University²)

(Accepted January 5, 2017)

Abstract

Among students enrolled in teacher-training course, not a few of them find difficulty with music classes. Those students as a whole do not have music experience before entering a college such as a piano lesson and a musical club activity, so that they tend to be afraid of musical practices including reading music and piano performance. Taking these circumstances account, it is necessary to deepen their music understanding and improve their expression as well as teaching skills within the given time.

In this study, we focused on "a creation of sound effects" that is not subject to reading music skill, and this is assigned to students as a task to experience listening and expression. Divided into groups of about six, students tried to draw images of sound effects evoked from a picture story, and then expressed them with various musical instruments. During this activity of creating sound effects they carefully listened to the difference of varied sounds, and exchanged their own ideas.

Through this activity all the conversations among students were recorded. And they were assigned a report with free description on "what you find good ways and means through creating sound effects" and also "what you find through appreciating the performances by other groups".

In this study, focusing on "understanding of musical elements and construction", we analyzed the content of students' conversations and of descriptions of their reports. The analysis showed that students tried varying musical elements such as dynamics and rhythm while listening to different sounds, and created sound effects using repetition of a melody and rhythm as well as dialogue of different parts.

As a result of the data analysis, creating sound effects demonstrates itself particularly useful as an activity that enable students to practically learn musical elements and construction within the limited ninety-minute class.

Key words : Creation of Sound Effects 効果音づくり
Training of Expression 表現力育成
Musical Elements 音楽の要素
Musical Construction 音楽の仕組み

1 はじめに

小学校音楽科は「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことを教科の目標としており、児童期の子どもたちに表現領域や鑑賞領域の諸活動で様々な音楽に触れさせることを通して、美的感性や情操を養い、人格形成に寄与することにある¹⁾。ピアノ等のレッスンや音楽系部活動の経験を持たずに養成校に入学してくる学生たちの中には、入学当初に味わう読譜やピアノの実技等への不安や戸惑いから、養成校における音楽の授業に対して苦手意識を持つ者が少なくない。これらの力量を習得するには地道な反復学習を要するため、彼らの苦手意識の払拭は決して容易なことではない。養成校の授業では、このような学生たちの存在を看過することはできないという現状がある。将来、児童が興味や関心をもって音楽活動を楽しむことができるような授業実践者となるためには、養成課程の段階で学生自身が音楽の諸活動を通して音楽を味わい、表現を楽しみながら音楽理解の深化を図っておくことが肝要だと言えよう。

平成25年3月、国立教育政策研究所が作成した報告書において、これから求められる21世紀型能力の中核となる能力は、「思考力」とであると位置づけられた²⁾。ここでは他者と協働・協調できる力が必須であり、協調的かつ創造的な問題解決が求められているということも示されている。思考力の育成は音楽科においても主要な課題の一つと言え、山田(2015)は音楽科授業づくりにおける思考力の育成のための具体的な方法について提案している³⁾。また、小林(2015)は先行研究をもとに集団思考が成立する条件を導き出し、それを組み入れた授業を構想し、実践を行い、その授業の分析結果をもとに音楽科授業における集団思考成立条件について考察している⁴⁾。

本研究では、音楽科授業における思考力の育成や苦手意識を持つ学生への音楽教育における課題を踏まえ、効果音づくりを通して音楽理解を意図した表現活動の実践を試みた。ここではピアノ初学者等の学生が苦手とする楽譜からは一旦離れさせることとし、既存の楽曲は用いず、即興で音を奏でながら表現の工夫を凝らし、その過程で得られる音の変化を感受することに目を向けさせた。

なお、本研究における音楽理解とは、小学校音楽科学習指導要領「音楽」の共通事項に記載されている「音楽の要素」と「音楽の仕組み」の理解を指すものとする。

2 研究方法

2-1 目的

効果音づくりの活動過程における発言及び活動後の自由記述の内容を分析し、音楽理解の観点から効果音づくりの有用性について明らかにする。

2-2 対象

平成27年度後期に、西九州大学子ども学科2年生を対象に4回の授業で実施した。本研究では、この間に欠席した者を除外した76名を対象とする。

2-3 活動内容

1回90分の授業の4回で、以下の活動に取り組みさせた。

2-3-1 (1回目) 紙芝居の選択と効果音のイメージを描く

1グループ6～7名程度に分かれて本学図書館所蔵の紙芝居の中から各グループ1冊を選択し、効果音のイメージを記入した付箋紙を該当箇所には貼らせた。付箋紙を貼り終えたグループは、効果音づくりを開始した。

2-3-2 (2回目) 効果音づくり

前回に続き、効果音づくりに取り組ませた。音楽室内にある打楽器やピアノ等の楽器に加え、必要に応じて新聞紙やペットボトル等の身の回りの物を用いることも可とした。また、各楽器の奏法は本来の奏法に限定せず、積極的に様々な音の出し方を試みるよう促した。また各グループに1台のICレコーダーを配布し、活動時の会話を録音させた。

2-3-3 (3回目) グループ発表

活動の成果として、グループごとに効果音つきの紙芝居を実演させた。

2-3-4 (4回目) 活動の振り返り

活動の振り返りとして、ICレコーダーに記録された発言内容の文字化、及び「音楽の要素」と「音楽の仕組み」に該当する箇所を抽出させた。さらに「効果音づくりで表現を工夫することを通して得た気づき」と「他のグループの発表を鑑賞して得た気づき」に関する自由記述のレポート提出を課した。

3 結果及び考察

3-1 効果音づくりに使用した紙芝居について

(表1)は使用した紙芝居の一覧である。紙芝居の選択理由は、以下の通りであった。

- ① 自分たちが幼少期に触れたことのある既知の物語であり、懐かしさを感じた。物語全体の流れが、すでに把握できていることから、効果音づくりに取り組みやすいと思った。
- ② 擬音が含まれていたことから、効果音のイメージが描きやすそうな気がした。
- ③ 緊張したり、ほっとしたり、慌てたりといった感情の変化が描かれており、それらが効果音づく

りのヒントになりそうな気がした。

- ④ キャラクターの対比が描かれており、効果音に活かせるような気がした。
- ⑤ 物語の場面に反復がある。
- ⑥ 時間の経過とともに場面の変化が表現されている。
- ⑦ 登場する人物や動物の動きを、音で表現できると思った。
- ⑧ 静かな場面や賑やかな場面があり、効果音の変化に活かせるような気がした。

3-2 効果音づくりに使用した楽器等について

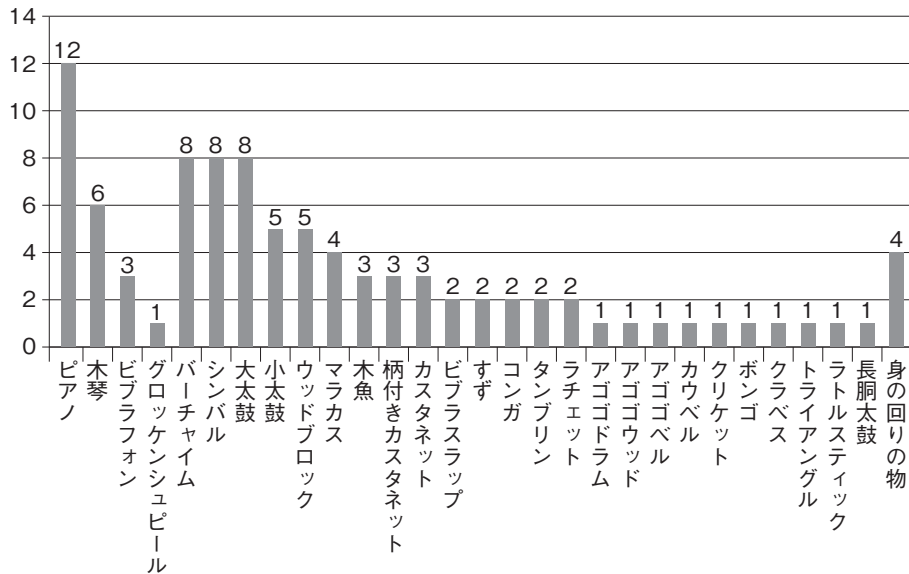
効果音づくりの活動過程では、実際に楽器を奏で

(表1) 紙芝居一覧

タイトル	作者(文)	作者(画)	出版社
たべられたやまんば	松谷みよ子	二俣英五郎	童心社
やっことどっこい赤おにさん	足沢 良子	安井 康二	教育画劇
おおかみと7ひきのこやぎ	大木 純	加藤 晃	教育画劇
へっこきよめ	香山 美子	川端 誠	教育画劇
3びきのこぶた	川崎 大治	福田 岩緒	童心社
おいしいランドのたんけんたい	本間 正樹	鈴木 博子	メイト
ジャックとまめのき	堀尾 青史	かみやしん	童心社
ちからたろう	川崎 大治	滝 平二郎	童心社
おむすびころりん	柴野 民三	安井 康二	教育画劇
てるてるてんきになあれ	岡 信子	西村 達馬	教育画劇
あわてんぼう ウサギ	インド民話	中沢 正人	教育画劇
さるかにがっせん	伊藤 海彦	黒井 健	メイト

(表2) 使用楽器等一覧

タイトル	使用楽器等
たべられたやまんば	ピアノ、マラカス、木魚、パーチャイム、ボンゴ、コンガ、シンバル、ビブラスラップ、柄付きカスタネット、大太鼓
やっことどっこい赤おにさん	ピアノ、ウッドブロック、鈴、大太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、足音
おおかみと7ひきのこやぎ	ピアノ、マラカス、シンバル、木琴、ビブラフォン、カスタネット、木魚、トライアングル
へっこきよめ	ピアノ、小太鼓、大太鼓、シンバル、パーチャイム、ウッドブロック
3びきのこぶた	ピアノ、コンガ、パーチャイム、ウッドブロック、マラカス、大太鼓、木琴、ビブラフォン
おいしいランドのたんけんたい	ピアノ、木琴、マラカス、ラトルスティック、小太鼓、パーチャイム、シンバル
ジャックとまめのき	ピアノ、ウッドブロック、木魚、ビブラフォン、大太鼓、小太鼓、パーチャイム
ちからたろう	ピアノ、アゴゴベル、パーチャイム、ラチュット、アゴゴウッド、ビブラスラップ、カウベル、シンバル、長胴太鼓
おむすびころりん	ピアノ、ウッドブロック、すず、木琴、柄付きカスタネット、クリケット、クラベス、パーチャイム
てるてるてんきになあれ	ピアノ、カスタネット、小太鼓、大太鼓、木琴、シンバル、パーチャイム、タンブリン
あわてんぼうウサギ	ピアノ、大太鼓、鈴、カスタネット、アゴゴドラム、柄付きカスタネット、木琴、タンブリン
さるかにがっせん	ピアノ、大太鼓、小太鼓、ウッドブロック、トライアングル、シンバル、ポリ袋、新聞紙、空気が入ったビニールの緩衝材(ひねりながら気泡を潰す)



(図1) 使用楽器別集計結果

ながら意見を述べ合い、最終的に使用する楽器と奏法を決定していた。各グループが使用した楽器等は、(表2)の通りである。(図1)は(表2)を楽器別に集計したもので、グラフ内の数値は各楽器を使用したグループ数を示す。

効果音づくりでは、タンブリンの皮を指先で擦る、大太鼓を小太鼓用のバチで打つ等の奏法の工夫が随所にみられ、通常の合奏では行わない奏法を考案していた。意図的に奏法を変えていく場合もあれば、試行錯誤を繰り返す中で偶発的に表現したい音を見つけ出すこともあった。音の微妙な変化を捉える体験は、奏でる際に「何を」「どのように」変化させたのかを、学生が意識するうえで貴重な機会をもたらすと考えられる。

3-3 効果音づくりの活動時の発言内容について

本実践では、各グループに1台のICレコーダーを用意し、効果音づくりの活動時の会話を録音させた。それを4回目の授業時の資料とし、発言(行動)内容を文字化の際に用いた。本実践では、それらがどの「音楽の要素」や「音楽の仕組み」に該当するのかについても分類させた。

効果音づくりでは2つの音楽室を用意したが、各教室とも複数のグループが同時に活動せざるを得なかったため、当然のことながら互いのICレコーダーには他のグループの音声も混入してしまった。しかし学生たちは、自分たちと他のグループの音声とを容易に判別していたことから、録音された音声を文字化するうえでの不都合は生じていない。

以下は、「おむすびころりん」の紙芝居を選択したグループの記録の一部である。各グループとも、発言者、発言(行動)内容、音楽の要素・音楽の仕組みについて、下記の要領でICレコーダーの記録を文字化していった。

発言者	発言(行動)内容	音楽の要素・音楽の仕組み
学生A	おむすびが転がるシーンは、軽くてコロコロって勢いよく動いていく音がほしい。	
学生B	この音、どう?(鈴を振る)	音色
学生C	何か違う気がする。転がっているような感じがしない。	
学生A	ピアノでこんなのは、どう?(中音域で下行の gliss.)	音色・リズム
学生D	おむすびが転がっている音にしては、ちょっと強すぎでしょ。	強弱
学生B	うーん、何か足りない気がする。	
学生E	何が?	
学生D	ピアノじゃなくて……。	音色
学生E	別の楽器も入れる?	音の重なり
学生C	ねえ、これも入れてみたら?(木琴で下行の gliss.)	音色・音の重なり
学生E	うーん、木琴だけの方がいいかも。	音色
学生F	木琴のグリッサンドの終わりに、ポコってウッドブロックを小さく入れてみて。	音色・リズム・強弱・音の重なり
学生A	どうする?	
学生D	重ねる。	音の重なり
学生A	おむすびが転がるたびに、この音でいい?	反復
複数	いいよ。	

発言内容は、①効果音として表現したい音のイメージの確認、②使用する楽器や奏法に関する提案、

③それに対する意見, ④音を聴き比べることを他者に促す発言, ⑤リズムや強弱に関する提案, ⑥表現の工夫に関するものであった。学生同士が, 互いに他者の意見に誘発されながら発言している様子が見える。

4回目の授業時に学生が記録した「音楽の要素」と「音楽の仕組み」に関するデータをもとに, 再度筆者がICレコーダーを再生して学生の集計結果を再確認し, それを本研究の分析データとした。その集計結果が(表3)である。

(表3) 効果音づくりの活動時における発言内容の分析結果

カテゴリー	対象数
音楽の要素 (音色, リズム, 強弱, 速度, 音の重なり, など)	1030
音楽の仕組み (反復, 問いと答え, 変化など)	44

まず, 「音楽の要素」のカテゴリーに関する発言を抽出し集計した結果, 対象数は1030を数えた。「音楽の要素」に関する発言は, 楽器の「何を」「どのように鳴らすのか」といった提案や, その提案をうけて音楽要素の「何を」「どのように変化させるのか」を議論する際に出ており, 複数の音楽の要素は絡み合いながら現れていた。このことから, 効果音づくりは, 表現しながら討論することによって, 音楽を特徴づけている「音楽の要素」を捉えさせることができる活動であると言える。

一方, 「音楽の仕組み」のカテゴリーの対象数は44で, 「音楽の要素」よりもかなり少なかった。「音楽の仕組み」は, つくった効果音を一層, 臨場感のあるものとして表現を工夫していく段階の発言に含まれていた。

下記の(表4)と(表5)は, (表3)の対象数を各カテゴリー内の項目別に分類し, 集計した結果

(表4) 表3の「音楽の要素」の内訳

項目	対象数 (%)
音色	468 (45.4)
リズム	156 (15.1)
強弱	153 (14.9)
速度	131 (12.7)
音の重なり	39 (3.8)
旋律	34 (3.3)
高いと低い	26 (2.5)
長いと短い	15 (1.5)
上行と下行	8 (0.8)

である。

効果音づくりの活動中の発言内容からは, 「音色」「リズム」「強弱」「速度」「音の重なり」「旋律」「高いと低い」「長いと短い」「上行と下行」の9つの音楽要素が抽出された。(表4)の「長いと短い」は, 楽器の余韻の有無のことを指して発言していたことから, 「リズム」での音の長短とは分けて集計した。また「上行と下行」は, グリッサンドや5度程度の順次進行や半音階での上行や下行に限定して集計したものであり, ピアノや有音程打楽器で奏することのできる「旋律」とは分けて数えた。さらに「音の重なり」は, ピアノや木琴などの有音程打楽器の和音リズム奏, 旋律の重なりに加え, 複数の打楽器を用いて同時に奏でているものを集計した。複数の楽器で同一のリズムを重ねて奏する場合と, 異なるリズムを重ねて奏する場合との混在がみられた。「音の重なり」については, “おむすびころりん”で例示したように, 「音色」などの他の音楽の要素と絡まっていることもあり, この場合は同一の発言を「音の重なり」と「音色」とに重複集計することとした。

「音楽の要素」に係る発言の中で最も発言数が多かったのは「音色」に関するもので, 全体の45.4%を占めていた。次いで「リズム (15.1%)」「強弱 (14.9%)」「速度 (12.7%)」という結果であった。これらの対象数は, 「音の重なり (3.8%)」「旋律 (3.3%)」「高いと低い (2.5%)」「長いと短い (1.5%)」「上行と下行 (0.7%)」とは桁が異なるほどの開きがあった。

学生たちは, まず, どの楽器を用いるのかを検討し, 奏法を工夫するという手順で取り組んでいた。このことから楽器を選択する際の決め手となる「音色」が対象数に反映し, 奏で方を工夫する過程で「リズム」「強弱」「速度」といった他の音楽要素が加わったものと考えられる。

(表5) 表3の「音楽の仕組み」の内訳

項目	対象数 (%)
変化	27 (61.4)
反復	9 (20.5)
問いと答え	8 (18.2)

(表5)は(表3)のデータをもとに, 「変化」「反復」「問いと答え」の項目別に分類し, 集計した結果である。「音楽の仕組み」に関しては「変化」が最も多く, 全体の61.4%を占めていた。次いで, 「反

復 (20.5%)」「問いと答え (18.2%)」という結果であった。

「変化」には同一リズムを別の楽器で引き継ぐことによる音色の変化に加え、同一楽器で音域やリズムパターンを変化させるものもあった。また、forteとpianoの対比やcresc.やdecresc.といった強弱の変化を加えることもみられた。さらに紙芝居の場面によっては、別の場面で用いた効果音の速度を変化させて用いたり、部分的にaccel.とrit.を対比させることもあった。「変化」は、主に紙芝居の登場者の感情変化や場面転換等を表現する際に活用していたのに対し、「反復」は紙芝居の物語自体に反復が含まれている場合に多用されていた。また、「問いと答え」も、登場者同士のやり取りの様子を表現する際に多用していた。紙芝居のストーリー構成と効果音での「変化」「反復」「問いと答え」は、関連し合っており、学生は紙芝居の物語上の展開を効果音の中に反映させていたと言える。

3-4 自由記述の回答内容について

3-4-1 「効果音づくりで表現を工夫することを通して得た気づき」について

「効果音づくりで表現を工夫することを通して得た気づき」に関する自由記述の対象数は141であった。これらを記録単位数として分析の対象とし、キーワードを抽出して分類し、集計した結果が(表6)である。

(表6) 「効果音づくりで表現を工夫することを通して得た気づき」に関する自由記述の分析カテゴリー一覧表

カテゴリー	対象数(%)
音楽の要素 (音色, 強弱, 速度, 音の重なり, など)	73 (51.8)
音楽の仕組みについて (変化, 反復, 問いと答え, など)	19 (13.5)
楽器の特性や奏法 (音域の広がり, 余韻, など)	25 (17.7)
音楽との係り (他者の意見, 共同での取り組み, など)	15 (10.6)
その他 (活動を振り返っての感想, など)	9 (6.4)

(表6)では、本研究の主題である「音楽の要素」と「音楽の仕組み」については、それぞれをカテゴリーの中に挙げることにした。それ以外のカテゴリーは、学生の記述内容のキーワードを整理した結果から、「楽器の特性や奏法」「音楽との係り」「その他」の3つを導き出した。また、「音楽の要素」「音楽の仕組み」及び「楽器の特性や奏法」は互いに関

連し合っているため、(表6)の対象数の集計を行う際には、以下の配慮を行った。まず、単に音色やリズム等の音楽の要素に関する内容を明記している記述については「音楽の要素」の対象数とした。しかし楽器の音域や音量の幅といった楽器の特性を述べる文脈の中で音楽要素を絡めている場合には、「音楽の要素」ではなく「楽器の特性」のカテゴリーの方に含めた。つまり、(表6)の作成にあたっては、学生の記述内容の文脈を読み取ったうえで集計上に反映させていくという手法を取った。

まず、「音楽の要素」のカテゴリーについてであるが、このカテゴリーは小学校学習指導要領(音楽)の共通事項にも記されている「音色」や「リズム」等の音楽を特徴づけている要素に関する内容で構成されている。個々の音を傾聴することによって得た気づきとして、音楽の要素の何に着目し、表現に活かしたのかに関する記述群である。(表6)から読み取れるように、「音楽の要素」に関する記述は、全体のほぼ半数にあたる51.8%を占めており、(表3)で示した効果音づくりの活動時における発言内容の分析結果と同様に、「音楽の仕組み」の対象数を大きく上回っていた。このことから効果音づくりの活動は、学生にとって音楽の要素を意識しやすく、音の変化を感受することを通して、個々の音楽要素について体験的に学習することができる活動であると考えられる。

次に、「音楽の仕組み」についてのカテゴリーであるが、このカテゴリーは、より効果的な表現を目指して自分たちが取組んだ工夫に関する記述に含まれていた。「変化」「反復」及び「問いと答え」といった音楽の仕組みに関する記述内容で構成されているカテゴリーである。物語の展開に反復があれば、その箇所のたびに効果音でも反復がみられた。また、登場人物の台詞の掛け合いの場面では、音の掛け合いを組み込むなど、「音楽の仕組み」に関しては、物語の展開との関連性が見いだされた。このことから、学生たちは物語の展開を味わいながら、音楽における「変化」「反復」「問いと答え」の工夫を試みていたと言える。

3つ目のカテゴリーは、「楽器の特性や奏法」である。効果音づくりに用いた楽器の中には、ビブラスラップやクリケットのように学生にとって馴染みの薄い楽器群も含まれていた。どのグループの学生も盛んに楽器を持ち替えながら、音を聴き比べていた。このような体験を通して得た気づきが、自由記

述の中にも記されていた。「大太鼓の皮を指先でトリルするように奏でた」「シンバルは打った瞬間には力強い音が出るが、その余韻は柔らかい音へと変化していく」「トライアングルもシンバルも、音が消えるまで待つと、驚くほど長く鳴り続けていた」「ピアノのペダルを使うと、音の表情が異なってくる」などの記述がみられた。楽器は奏法を変えることによって、如何様にも音を変化させることができるが、記述からは様々な楽器を手に取り、奏法を工夫し、音を傾聴することによって楽器の特性に関する気づきを得ていたことが伺える。

4つ目のカテゴリーは、「音楽との係わり」のカテゴリーである。ここには「友だちと意見を述べ合うことによって、自分とは違う発想があることを知った」「音楽的に豊かな表現のためには、よく聴き取ることが欠かせない」「色々な楽器を使って、楽しみながら音と向き合うことができた」「音楽を奏でる際に、表現したいイメージを描くことが豊かな表現へと繋がっていくということに気づくことができた」といった、学生自身の音楽との係わりに関する記述が得られた。

さらに5つ目は「その他」のカテゴリーで、学生の感想や反省に関する記述である。「楽譜を使わなかったことによって、音を聴くことや表現の工夫を考えることに集中することができた」「音楽のイメージを表現すること自体は楽しかったが、なかなか思い通りの表現にはならなかった」「受け身にならずに、もっと発言して積極的に友だちの意見に伝えていくべきだった」「別の紙芝居でも取り組んでみたい」「音楽を味わったという充実感がある」といった記述があった。

「音楽の要素」と「音楽の仕組み」の両者の自由記述を合わせると、全体の65.3%を占めていた。このことは、「音楽の要素」や「音楽の仕組み」の学習における効果音づくりの活動の有用性を物語っていると見えよう。

3-4-2 「他のグループの発表を鑑賞して得た気づき」について

他のグループの効果音付き紙芝居の発表を鑑賞することによって得た気づきに関する自由記述では、86記述が得られた。それらを記録単位数として分析対象とし、キーワードを抽出して分類した。(表7)は、その結果をもとに作成した。

他のグループの発表を鑑賞して得た気づきとしては、「楽器の使い方」に関する記述が最も多く、全

(表7) 「他のグループの発表を鑑賞して得た気づき」に関する自由記述の分析カテゴリー一覧表

カテゴリー	対象数(%)
楽器の使い方 (奏法の違い、楽器の組み合わせ、など)	39 (45.3)
効果音の使い方 (朗読と効果音との音量バランス、音を入れるタイミング、間の取り方、など)	29 (33.7)
その他 (身の回りの物の活用、役割分担、など)	18 (20.9)

体の45.3%を占めていた。次いで「効果音の使い方(33.7%)」「その他(20.9%)」という結果であった。

まず、「楽器の使い方」のカテゴリーについてであるが、このカテゴリーは演奏に使用するバチの選択、合奏の時とは異なる楽器の奏で方に対する工夫、使用する楽器の組み合わせ方といった「楽器の使い方」の記述内容で構成されている。「シンバルのバチ打ちでは、グループによって使用するバチの素材が異なっていたため、それぞれの音色や強弱は全く異なったものとなっていた」「一つの楽器から様々な音を生み出すことができるということが分かった」といった記述が得られた。

このように、「楽器の使い方」では、他のグループの発表を鑑賞し、自分たちが用いた楽器との音の違いに目を向けたことによって得た気づきが記されていた。学生自身が創意工夫を凝らした体験を持ち、そのうえで他のグループの発表を鑑賞することは、自分たちとは異なる楽器の使い方への気づきや、表現の違いを知る機会となり得ると言える。

次に「効果音の使い方」についてのカテゴリーについてであるが、このカテゴリーは効果音を入れるタイミング、朗読の声と効果音の音量バランス、朗読と効果音挿入時の間の取り方、楽器相互の音量バランスといった内容で構成されている。「効果音の使い方」に関する記述では、紙芝居全体の表現を高めるためには、朗読の声と効果音の両者の音量バランスを整えることが不可欠であるという指摘がみられた。また、「間の取り方」に着目した記述もあった。これに関しては、「朗読担当者の表現としての間の取り方」「登場人物同士の台詞の掛け合い」といった朗読における「間合い」についての記述に加え、「朗読に効果音を挿入するタイミング」「複数の効果音の掛け合いにおける間」といった記述がみられた。いずれも具体的な鑑賞例を挙げながら記述しており、学生たちが「間」の持つ効果に目を向けて

いたことが伺える。

上記の2つのカテゴリーに含まれない記述内容については、「その他」のカテゴリーに含めた。例えば、他のグループの取り組みに対する感想や、役割分担に関する記述である。12グループ中2グループではあったが、自分たちの足音を挿入したり、緩衝材や新聞紙などを持参したグループもあった。このカテゴリーでは、このような身の回りの物を活用することへの感想や、グループ内の全員が役割分担を上手く果たしていくことが、作品の出来に大きく影響してくるという指摘等が書かれていた。

以上より、学生たちは他のグループの作品鑑賞を通して、他のグループの表現上の秀でた箇所を捉えるとともに、それを参考に、自分たちの作品の具体的な改善点を見出していた。

本研究における紙芝居の効果音づくりでは、既存の楽曲に頼らずに表現することを求めた。音楽は聴く活動とも言われ、鑑賞だけでなく歌唱、器楽、創作等、全ての音楽活動は聴くことに支えられている。様々な楽器を手に取り、奏で、表現しながら耳を傾けて聴くことの重要性を学生に伝えたいという授業者の意図もあり、即興で奏でる活動を組み入れた。その結果、学生たちは試行錯誤の発言を繰り返しながら、個々の音をよく聴き取っていたことが録音や記述の中に収められていた。

授業の振返りとしてICレコーダーを再生し、自分たちの活動を振り返らせた。特に、発言内容を「音楽の要素」と「音楽の仕組み」の観点から集計させたことは、結果的に学生自身が自らの表現を客観視することができる機会となっていた。表現活動、発言（行動）内容のデータ分析、自由記述の分析結果から、本実践は学生が音楽理解を図るうえで有用であることが示唆された。

4 おわりに

本稿では、平成27年度の学生を対象とした実践の分析結果から考察を導いた。その結果、本研究での実践は、学生にとって「音楽の要素」と「音楽の仕組み」に関する理解の一助と成り得る活動であることが示唆された。

しかし一方で、個々の学生、特に音楽に対する苦手意識を持っている学生にとって、効果音づくりでの音楽体験がどのように影響していたのかは不明で

ある。データの蓄積を図りつつ、集団活動における個の思考を捉えることを検討する必要がある。今後の課題として考えていきたい。

文 献

1. 文部科学省『小学校学習指導要領 音楽』（2008）
2. 勝野依彦（研究代表者）（2013）『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』国立教育政策研究所 p. 27
3. 山田潤次（2015）「思考力の育成に資する授業づくりに関する一考察 —音楽科のばあい—」佐賀大学教育実践研究第31号 pp. 51-60
4. 小林佐知子（2015）「音楽科授業における集団思考成立の条件—小学校1年生の「図形楽譜づくりの場合」—」日本学校音楽教育実践学会紀要 Vol. 19 pp. 27-38
5. 櫻井琴音（2012）「創造的音楽活動の教材に関する一考察—紙芝居の効果音—」西九州大学子ども学部紀要 第3号 pp. 27-37